

「百人一首」の魅惑 小林賢太

朝ドラの通称で親しまれるNHKの連続テレビ小説は、何かと話題になることが多い。短歌との関係で言うと、前作「舞い上がれ！」では主人公の連れ合いが歌人という設定で、短歌ブームとも相まって注目を集めた。そんな「舞い上がれ！」が最終回を迎えたことをやや寂しく思いつつ、今作「らんまん」を観ていたら、再び歌と関わりの深い内容が放送された。第十二週でのこと、主人公・万太郎が結婚相手の寿恵子を高知の実家に連れ帰った際、祖母・タキが寿恵子に「百人一首」の勝負を挑んだのである。

突然の「百人一首」に「？」と思った方もいるかもしれないが、実は「百人一首」は女子教育と関係が深い。江戸時代には既に女子用の往来物（寺子屋などで用いられる教科書）に「百人一首」が収載されていたし、カルタとしても普及していた。江戸期には漢詩カルタもあったが、これは武士の男子用で、それを考えると百人一首カルタは主に女子が遊んだものと想像される。タキが嫁の教養を「百人一首」で試そうとした設定にも納得がいく。

ところで、「百人一首」を作ったのは誰か、と問われれば、おそらく多くの方が藤原定家と答えるだろう。そう明記した辞書もある。しかし今、「百人一首」定家撰説は否定されつつある。

ややセンセーショナルな書き方をしてしまったが、厳密に言えば、「百人一首」の母胎となった「百人秀歌」は定家撰であろうが、

最終的に現在の「百人一首」の形に整えたのは別の誰かということである。これを鮮やかに論証したのは和歌研究者の田淵句美子氏であった。詳細は田淵氏「百人一首」の成立をめぐる（『中世宇都宮氏』戎光祥出版）、『百人一首』をゼロ時間へ（『図書』八八五号、岩波書店）、『百人一首』の現在（『青簡舎』等を参照されたい）が、一部を簡単に紹介しておきたい。

まず「百人秀歌」は、諸資料から判断して定家撰の可能性が極めて高い。「百人一首」と九十七首が同じだが、配列が異なる。歌の違いの一例としては、末尾の後鳥羽院・順徳院の歌がない。さて、定家の日記によると、彼は鎌倉幕府の有力御家人・蓮生に請われて「古来の人の歌各一首」を贈っている。これが「百人一首」では？と思いたくなるが、「百人秀歌」のことだろう。なぜなら、幕府に戦を仕掛けて配流された上皇の歌を、幕府の有力者に贈るとは考えがたいからである。そもそも後鳥羽院・順徳院という諡号は没後の呼称であり、定家が活躍した時代にはあり得ない。さらに「百人一首」という作品が文献に登場し始めるのは、定家死後かなり時を経た南北朝時代になってからである。この他にも様々な論拠から、定家撰説は見直されることになった。

とはいえ、「百人一首」の価値が減じたわけではない。むしろ定家という伝説的歌人と結びつけたくなるほど、「百人一首」は魅惑的な作品だと言えるだろう。それに、今まで当然だと思われてきた通説が覆されるといって刺激的な経験と、本当の撰者は誰かという新たな謎を我々に与えてくれた。「百人一首」は、まるで文学の醍醐味が詰め込まれた宝石箱のようである。